

【vol.72】オルタード・ドミナントスケールの重要ポジション

どうも、大沼です。

引き続き、メロディックマイナー系のスケールを覚えていきましょう。

今回は『オルタード・ドミナント・スケール』についてやっていきたいと思います。

ここでも、『ドミナント』の名前が出て来ますが、これは俗に言う『オルタード・スケール』の事ですね。

ジャズなどに興味を持ち始めると、名前を耳にし始めるスケールですが、実際問題、完全な独学では、理解、習得に苦勞するような気がします。

(※僕も自力で勉強していた時は意味不明でした)

弾いてみたことくらいはあるけど、その後、このスケールをどうすれば良いのか？
そういった所で悩んでいる人もいるかもしれません。

何だかんだ言って、厄介なところも多いスケールなので、
この機会に、基本から学んでいきましょう。

では、『オルタード・ドミナントスケール』の基本ですが、このスケールも、リディアン \flat 7(リディアン・ドミナント)と同じように、『ドミナント』と言う名前が付いているので、ドミナント7th関係のスケールですね。

スケールの呼び方としては、正式な決まりがあるのかはわかりませんが、ある程度、しっかりと解説が成されている媒体では『オルタード・ドミナント』の名称が使われている印象です。

ですが、口頭などでこのスケールを呼ぶときは『オルタード(スケール)』と、省略して呼ばれることがほとんどだと思うので、このテキストでもそれを使わせてもらいます。

さて、このオルタードスケールについてですが、メロディックマイナーのモードとしては、第7音をトニックに見て、そこから始めたスケールですね。

※メロディックマイナースケールのダイアトニックコードとモードスケール

I mM7	メロディックマイナー
II m7	ドリアン\flat 2nd
\flat III aug M7	リディアン\sharp5th(リディアン・オーギュメント)
IV 7	リディアン\flat 7th(リディアン・ドミナント)

V 7	ミクソリディアン♭6th
VI m7(♭5)	エオリアン♭5(ロクリアン ^{♯2})
VII m7(♭5) or VII7(♭5)	オルタード・ドミナント

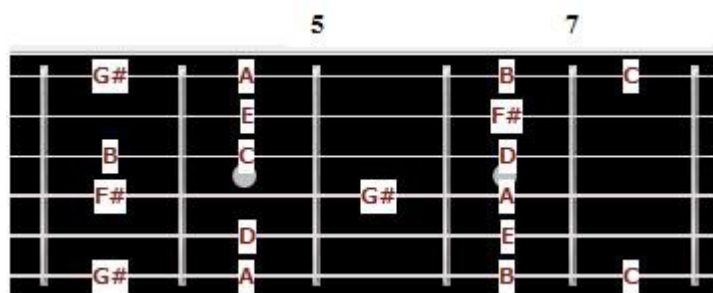
なので、とりあえずのポジションとしては、メロディックマイナーの半音下から弾けば、一応、オルタードスケールを弾いている事になる、と。

ここまでの一連のテキストでは、Aメロディックマイナーを基本にスケールを見てきているので、7度(M7th)の音をトニックにする場合、『G♯オルタードスケール』が導き出されますね。

AmM7	Aメロディックマイナー
Bm7	Bドリアン♭2nd
Caug M7	Cリディアン♯5th(C♭リディアン・オーギュメント)
D7	Dリディアン♭7th(Dリディアン・ドミナント)
E7	Eミクソリディアン♭6th
F♯m7(♭5)	F♯エオリアン♭5(F♯ロクリアン^{♯2})
G♯m7(♭5) or G7(♭5)	G♯オルタード・ドミナント

と、言う事で、6弦トニックのポジションを見てみましょう。

図、G♯オルタード・ドミナントスケール重要ポジション(6弦ルート)



弾き方(指使い)は、先ほど言ったように、vol.70 でやった Aメロディックマイナーのポジションを半音下から弾き始めればOKです。

譜例、G♯オルタード・ドミナントスケール重要ポジション(6弦ルート)

人 人 → 後はメロディックマイナーのポジションと同じ → 人 人

さて、上の譜例には、想定するコードとして、G#m7(b5)が示してありますね。

オルタードスケールのインターバルは、

tonic、m2nd(b9th)、m3rd(#9th)、M3rd、b5th(= #11th)、b6th(b13th)、m7th

となっています。

これを元に、トニックから3度積み(1音置き)でコードを構成すると、

tonic、m2nd(b9th)、m3rd(#9th)、M3rd、b5th(= #11th)、m6th(b13th)、m7th

と赤字で示した音が導き出され、Xm7(b5)のコードが出来上がります。

(※今回はG#m7(b5))

ですが、先ほどのメロディックマイナーの一覧では、

『VII m7(b5) or VII7(b5) オルタード・ドミナント』

と、ドミナント7thのコードも表記してありました。

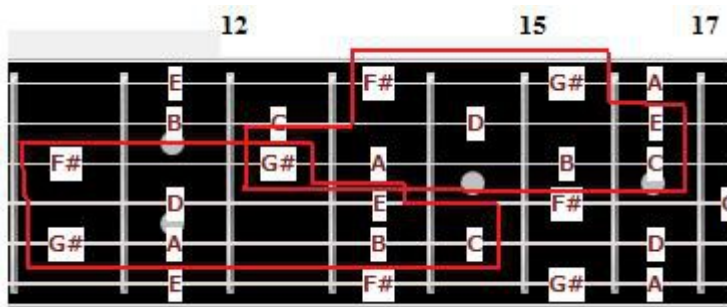
これは話は単純で、オルタードスケールの構成音にはM3rdも含まれているので、m3rdとM3rdを入れ替えてみると、X7(b5)のコードも作る事が出来る、とそういう事です。

通常のダイアトニックコードの構成理論では、トニックからの3度積みが基本なので、元々は、VII m7(b5)のコードをメロディックマイナーのVII度のコード、としている様ですが、そこからの派生系として、VII 7(b5)も考えられている様です。

このオルタードスケールも、ドミナント7th(X7)のコード上で使うスケールですし、ドミナント・スケールの分類としての、「M3rdとm7thを含む」の条件にも当てはまるので、恐らく、後発的にドミナント7th関係のロジックも考えられていったのだと思います。

では次に、5弦にトニックを見たポジションを弾いてみましょう。

図、G#オルタード・ドミナントスケール重要ポジション(5弦ルート)



ここも、Aメロディックマイナーで覚えたポジションの、半音下からグリッと始めるだけです。指使いも、先ほどの6弦トニックの時の考え方と同じです。

ただ、単純にポジションを弾く分には、以前のAメロディックマイナーとほぼ同じですが、スケールのインターバル構成は著しく違う、と言う所には気を付けておいてください。

さて、これで一応、オルタードスケールの重要ポジションをいつもの様にさらったわけですが、ここまでを頑張ってこなした時点で、恐らくほとんどの人が思うのが、

『で、このスケールの、何を、どうしたらいいのか？』

と言う事だと思います。(※僕も昔そうになりました)

なので、この辺りの疑問を解決する為に、事前の準備として、もう少し、このスケールの事を詳しく分析してみましょうか。

まず『オルタード(altered)』と言う単語自体は『変更された(変化した)』と言う意味なので、文字通り、そのまま捉えるならば、何かが変更されているわけですね。

では、何を『変更』したのか？と言うと、テンションノート(9th、11th、13th)を変更したのです。(※#やbの付かないナチュラル・テンションを半音上下に変更した、と言うのが名前の由来のようです)

前回から、『ドミナント(系の)スケールはM3rdとm7thを含むもの』と言う事を、少しずつお話ししていますね。

じゃあ、そもそも『ドミナント・スケール』の代表的なものってなんだろう？と考えた時、上の理屈を踏まえると、まず、当然 tonic があり、M3rd、m7th を含む、となりますよね。

で、その時点で、とりあえずその3音を同時に鳴らしたりしてみると、そこにはP5thが入っていませんが、『X7』の様なコードが出来上がります。

試しに、このP5thの入っていない状態でコードを鳴らしてみると、これだけでも結構、ドミナント系統の雰囲気が出ていますね。

ならば、と言う事で、この「tonic、M3rd、m7th」の音列に、一般的に使用頻度の高そうな音として、M2nd(9th)、P4th(11th)、P5th、M6th(13th)を入れてみたりすると、それはミクソリディアンスケールになります。

なので、ミクソリディアンスケールは『ドミナント系のスケール』になりますね。

そもそも『V 7』のコードの元のスケールなので、当然と言えば当然ですが。

さて、ではそのミクソリディアンが、オルタードとどう関係しているのか？についてですが、ここで2つのスケールのインターバルを比べてみましょう。

※ミクソリディアンのインターバル

tonic、M2nd(9th)、M3rd、P4th(11th)、P5th、M6th(13th)、m7th

※オルタードのインターバル

tonic、m2nd(♭9th)、m3rd(♯9th)、M3rd、♭5th(♯11th)、m6th(♭13th)、m7th

こうして見てみると、『alter=変化、変更』の名の通り、ある種一般的な響きのミクソリディアンに比べて、ドミナント・スケールの基準である「tonic、M3rd、m7th」以外の構成音が全て変わっていますね。

こういったところから、『オルタード(変更した)・ドミナントスケール』と言う名前が来ているのだと思います。(※これも、何時、誰が決めたのかはわかりませんが)

ちなみに、どこかで解説したような気もしますし、勉強熱心な人は聞いた事があると思うのですが、一般的には、♯や♭の付かない9th、11th、13thをナチュラル・テンション、♭9th、♯9th、♯11th、♭13thをオルタード・テンションと分類していることが多いです。

ですが、もうちょっと詳しく解説された理論書などを見てみると、♯11thについては、ナチュラル・テンション(に近い扱いをする)とする解説もあつたりします。

これは恐らく、リディアン・モードの関係(メジャーキーで言うIV M7、マイナーキーで言う♭VI M7の、それぞれのダイアトニックコードに♯11thが乗る事)から、ナチュラルに分類する、と言う解釈がされているのだと思いますが。

後は、もっと深く考えていく場合、キーと基準スケール、ダイアトニックコードのそれぞれの関係性から、#や♭が付くテンションでも、そのコードに対してはナチュラルである、と言う分類がされていたりして、話が複雑になっていたりもします。

とは言え、現時点ではそこまで細かく把握する必要もないので、『#や♭が付かないテンションがナチュラル・テンション、付くテンションがオルタード・テンション(でもなんか、他にも色々と分析があるらしい)』位の感覚でいてもらえればOKです。

(※場合によっては#11thはナチュラル・テンション寄り(に近い扱いをする)と考えておくと良いかもしれません)

後、ちょっと注意して欲しい事として、今回は、ミクソリディアンスケールと比較してオルタードを見ていきましたが、オルタードスケールは、元々、ミクソリディアンスケールを変化させて、この世に登場したものではありません、と言う所を理解して置いてください。(※僕個人では確証が得られませんので)

このテキストでは、比較対象としてわかりやすかったので比べてみたものです。

オルタードの大本の成り立ちは、恐らく、普通にメロディックマイナーのスケールが使われる様になって、その第7音からスケールを始めてみたら、そういう構造のスケールが出てきた、というモノだと思います。

それが偶然、#や♭の付いたテンションを沢山含む、ドミナント・スケール(の様な構造)だった、と。

さて、では今回は以上になります。

今回のオルタードを含む、最近学んでいた、メロディックマイナー、リディアン♭7thの『何を、どうしたら良いのか?』については、次回以降の実戦編でやっていきます。

まずは、それぞれのスケールをじっくり弾いて、構造を理解して、一定以上、身体に馴染ませておきましょう。

「使う」のはそれからでも遅くはありませんので。

後、最近、断定が出来ない解説が多くなってきましたね。笑
(※出来る限り調べてはいますが)

もしかしたら、音楽大学の図書館や国会図書館などで古めの書物を漁ってみれば、どこか

に成り立ちが書いてあるのかもしれませんが。

ですが、その様な場所に侵入するのは、中々、一個人には難しいところです。
(※国会図書館は入ろうと思えば入れますが)

現在、音楽をやる上で使われているロジックの、大本を全て正確に知ろうと思ったら、究極的には過去にタイムスリップする必要があるような気がしますし。

まあ、さすがにそれは無理なので(笑)、実用的な範囲で、過不足の無いレベルの解説を心がけています。

もし、誰か他の先生に習う機会が合るならば、細かいところを聞いてみても良いですし、とにかく自分で研究してみるのもありでしょう。

そもそも、「音楽的な自力、自己解決力」を身に付けるのがこのテキストの目的なので。

さて、と言う事で、ここ3回ほど続いた、メロディックマイナー系の重要スケール解説は以上になります。

恐らく、次回か、次々回くらいから実戦に入っていきますので、日々の練習に取り入れるなどして、各スケールに慣れておいてください。

ではまた次回。

ありがとうございました。

大沼